

2021.1.28 No393

おきがくろうニュース
沖縄学校事務労働組合



自らの要求は自らの手で！

カンパ送付先

郵便振替 02090-0-2239
沖縄学校事務労働組合

連絡先

e-mail:

okigakuro2017@gmail.com
HP:okigakuro.web.fc2.com

仕事や生活に役立つ図書館！（2）

今回は前々回の記事（2020年11月26日付け第391号）の続編として、学校事務職員に関するオススの本を紹介しします。母親が久米島出身というルーツを持ち、『琉球新報』に「ウチナー評論」というコラム（毎週土曜掲載）を寄せている元外務省主任分析官で評論家の佐藤優氏は、読書の効用を「負の感情に対する耐性強化」という意外な視点から説明しています。

「そのためには二つの方法しかありません。一つは経験を積んでいく。もう一つは代理経験を積んでいく。代理経験とは、すなわち、自分よりもひどい目に遭った人間から話を聞くこと。負の感情を爆発させた結果、どんな目にあつたかを聞くことです。それから、ノンフィクションや小説を読むこと、映画やDVDを観ること。経験できないようなひどい世界について山ほど知っておくのは有益です。それによって、負の感情はかなり抑制できます。」

（『佐藤優の実戦ゼミ「地アタマ」を鍛える！』

文藝春秋、2015年、p. 30）

学校事務職員として、そのような「代理経験」を積むことができる、オススの2冊を紹介しします。

* 1 藤井誠二『学校の先生には視えないこと』

（ジャパンマシニスト社、1998年）*

著者はノンフィクション作家の藤井誠二氏です。1965年、愛知県生まれの氏は、管理教育で有名な当地で、高校在学中からその告発運動をするような、高い社会意識を持った学生でした。卒業後は教育分野を出発点に、様々な社会運動に関わりながら実際の現場で取材し、多くの媒体で執筆してきた方です。最近の代表作としては、「沖縄戦後史の闇」と言われた特殊飲食店街の宜野湾市・真栄原新町を舞台に描いた『沖縄アンダーグラウンド 売春街を生きる者たち』（講談社、2018年）が挙げられます。

書名が挑発的な『学校の先生には視えないこと』

は、著者の原点である教育にまつわる比較的初期の作品にあたり、日本教職員組合の機関誌・月刊『教育評論』で、氏が連載した「教職員群像」に加筆・書き下ろしを含めて編集したものです。学校事務職員を含めた計12職種の人々が、全て実名で取材を受けたルポとなっています。興味深いのは、多くの方々が日本の教育はもとより、「学校の先生」に対して多くの不満や疑問を持っている点です。著者の藤井氏も、「学校王国の主」（p. 73）たる先生に対して、かなり厳しく批判を加えています。

「（前略）『先生』という権威性にひたり、子どもにとっての抑圧装置としての学校を認識できず、すなわちその先兵としての自覚も薄い教員が多い（後略）」（p. 2）

「硬直化した『先生の発想』や『先生の言葉』は、時代錯誤の学校システムを温存させるが、子どもの救済へ向かう改革を妨害する。『学校の先生には視えないこと』という本書のタイトルにムカついた人はまさに『妨害者』の一員である。」（p. 3）

「多くの教師たちは、『教員試験に受かった』ことだけで、生徒とのコミュニケーション・スキルに長けていると勘違いしている。それも、『自分の言うことは正しい。子どもは自分の言うことを聞くはずだ、聞くべきだ』という、一方通行のコミュニケーションだ。」（p. 105）

「日本の学校システムに通底する『点数で人を判断する』という価値観の申し子のような官僚たちが破綻・腐敗したことは、そのまま学校システムのおおきな誤りを示している。高い学歴を得てきた、学校のなかで『良き子ども』であったはずの人間が必ずしも『良き大人』にはならず、逆に自らが身を置く機構のなかで疑問を感じるができないで、公共のために生きるという理想から果てしなく離れた地平で墮落していったことか。学校的勝者は必ずしも『良き人間にならず、良き社会もつukらない』と

いったことが証明された、とわたしは考えている。本書に登場していただいた方々のメッセージを『視えない』『視ようとしなさい』学校の『先生』たちは、破綻した教育システムの補完者になるだけである。」

(p. 228)

ラップバトルで言えば、まさに「パンチライン」(聴衆が沸く決定的な表現)だらけの1冊です。最後に思わず吹き出してしまった箇所として、現業職員(用務員)の松岡武司氏の発言部分を紹介します。話題は取材当時(1996年2月)、日教組全国教研集會が開催され、そこで発表されたとある「詩」についてでした。いじめ問題を題材にして教師たちがつくった「死なないで!」という現代詩で、当時の新聞にも掲載されたそうです。その詩を何度も読んだ氏の感想が、本書で最も辛辣なキラフレーズでした。

「あれだけの頭脳が集まって、あれだけのものしかできないとは……文面はきれいですが、ぜんぜん伝わってこないのです。いったい、どうしてでしょうか。」(p. 152)

*2 藤原文雄『学校事務職員という仕事・生き方』

(学事出版、2012年) *

編著者は教育経営学を専門とする藤原文雄氏です。氏は学校事務職員についての著作を持つ研究者であり、文科省による各種会議でも委員を務めた方です。本書には、10歳代から60歳代までの総勢22人の学校事務職員による「自分の軌跡(歩み)」が掲載されています。具体的な本書の内容については、藤原氏や寄稿者の多くが「共同実施」に肯定的であり、また氏が学校事務職員のことを「学校運営職員(スクール・ビジネス・マネジャー)」と捉えていることなど、部分的に首を傾げざるを得ない点も多々あります。

しかし、「管理者や教員との軋轢」や「仕事と子育ての両立の難しさ」といった身近な話題から、いまや若手や中堅がほとんど知らない「義務教育費国庫負担制度」や「人材確保法」などの歴史的経緯までが、その渦中にいた当事者によって語られている点を考えると、やはり一読の価値はあると思います。その中でも今回紹介したいのは、学校事務職員K氏(北海道、中学校勤務、男性、40歳代)による教頭

との激しいバトル部分です。教員からの要望でクラス数分の水槽購入を検討していたK氏は、ある日の理科準備室で、水を捨てただけの汚れた水槽が山積みになっている現状を目にしました。無駄な出費削減と、他の教材購入への予算配分を考え、教員に自分で水槽を洗浄・返却してもらう旨の呼びかけを、教頭に対して相談・提案したそうです。すると、教頭から予想外の反応が返ってきました。

「そうしたら教頭は、『先生方に水槽を洗わせるわけにいかない。貴方が洗えばいいだろう。洗うのが貴方の仕事だ』と話をしてきたのです。当時の私は啞然として、思わず『自分で使用したものは自分で可能な限りもとの状態にして戻すのは常識だと思います』と反論をしました(中略)。険悪な雰囲気のまま、その場は終わり、それから二時間後、今度は教頭が私のところにやってきました。そして開口一番、『貴方は地方公務員法を知っているか?』と。つくづく生意気な私は、『はい、知っています。私は行政職員ですから法律には教員以上に明るいです。だいたい、先生方は教育学部卒の方が多いいと思いますが、私は一応、法学部卒ですから、多くの先生方よりは、少なくとも知っています』と。すると、教頭は『地方公務員法に、公務員は全体の奉仕者と書いてあることは知ってるな? 貴方は全体の奉仕者なんだよ。だから、貴方にその気持ちがあれば、水槽は自然に洗えるはずだ』と。私は『それを言うなら、教頭先生も先生方も地方公務員でしょう? 全体の奉仕者である先生方が洗えばいいでしょう?』と本当に生意気な私。教頭は『貴方に何を言っても話にならない。もういい。その気がないなら仕方がない。貴方は全体の奉仕者ということについて理解できないから、地方公務員として失格だ』と言ってその場を立ち去りました。」(pp. 86-87)

これまで接してきた「歴代のおバカさん達」の顔が浮かんできましたか? 同業他者の「代理経験」を読める上記2冊のような類書は、やはり少ないようです。今後の「ここ一番!」に備えて、楽しみながら「代理経験」を積んでゆきましょう。本組合では、面白かった本や映画をオススメしあっています。読者のみなさんにもとっておきの1冊や1本はありませんか? ぜひ本組合にも教えてくださいね!